

「**相関社会科学演習 I**」（大学院総合文化研究科）
「**グローバル・スタディーズ解析論 IV**」（GSI-WINGS）
「**特殊講義 政治思想史学の先端 II**」（教養学部後期課程）

馬路智仁

大学院総合文化研究科国際社会科学専攻

tbaji@waka.c.u-tokyo.ac.jp

近代日本のリベラリズム／自由主義

曜限：毎週金曜日、3 限目（13:15～14:45 *若干の延長もあり得る）

場所：10/7の初回のガイダンスは11号館1109教室

*2回目以降は、**2号館303室**

*原則対面で行う。

<概要>

本授業（ゼミ）では、政治思想史における主要な伝統でありながら、最も捉え難い政治イデオロギーの一つである「リベラリズム／自由主義」について検討する。とりわけ、近代から今日に至るまでの日本において、その言葉がいかなる文脈で、どのように意味づけられ、その言葉の下にいかなる思想家・知識人・政治家が包含されてきたか、考察する。

このとき導きの糸とするのは、ダンカン・ベル「リベラリズムとは何か」（2014年、邦訳2021年）における、文脈主義（contextualism）のアプローチに基づく以下のようなリベラリズムの定義である。

“[T]he liberal tradition is constituted by the sum of the arguments that have been classified as liberal, and recognized as such by other self-proclaimed liberals, across time and space.”

「リベラリズムの伝統は、時間・地域を跨いで、リベラリズムと分類されてきた議論と、リベラルを自任する者によってリベラリズムと認識されてきた議論をすべて足し合わせたものから成り立つ。」¹

本ゼミでは、この「総和的構想（summative conception）」とベルが名づけた定義を基に、日本における「リベラリズム／自由主義」²について実践的に考察する。

¹ Duncan Bell, “What Is Liberalism?” *Political Theory* 42, no. 6 (2014), 689-90 (reprinted in Bell, *Reordering the World: Essays on Liberalism and Empire*, Princeton University Press, 2016); ダンカン・ベル（馬路智仁／古田拓也／上村剛訳）「リベラリズムとは何か」『思想』1164号（2021年4月）、16頁。なおこの論文は、リベラリズムについて説明した著作のなかで近年世界で最も読まれているものの一つである。

² ただし「日本の」という形容詞には歴史的な困難が付きまとう。戦前に「日本」とされていた領域と、現在の「日本」のそれが異なるからである。戦前の朝鮮半島や台湾でリベラルな思想が展開されて

これは、「総和的な」リベラリズムの外延をさらに拡大しようとする試みである。すなわち、ベル（や他の文脈主義的なリベラリズム研究者）が行っている分析が主に英語・ヨーロッパ語圏を射程とするのに対し、本ゼミではそれを日本（日本語圏）にまで拡張しようと試みる。「時間・地域を跨いで（across time and space）」の空間領域をさらに広げるのである³。

なお、「時間・地域を跨いで」の意味を、「他国（他言語圏）においても」あるいは「普遍的に」そのように分類されてきた・認識されてきた、と強く解釈することも可能であるが、本ゼミではこの解釈をとらない（おそらくベルもそれを意図してはいない）。「時間・地域を跨いで」は、より緩やかに、その地域・時代の固有性を承認する表現と解する。たとえば、日本の昭和時代から今日に至る時間軸において、そのように分類されてきた・認識されてきたものをリベラリズムの伝統に含める、と理解することとする。

ただし、このようにリベラリズムの「総和的構想」を日本に適用するとき、非ヨーロッパ固有の、特に日本のように、輸入学問およびそれと結合する形で自国特有の学術を構築してきた地域固有の問題が浮上する。ベルのように主に英語圏のリベラリズムを対象とする際には考察する必要のない問題である。この内、最も大きな一つは、日本語の「自由主義」というヴァナキュラーと英語の「リベラリズム」が、どのように区別され、または混成・混同され、適用されてきたのかという問題である。これは単に語彙論的な訳出上の問題に留まらない。これらは単純に置き換えられてきたわけではない。というのも、近代から今日に至るまでしばしば日本では、「リベラリズム」は独特な trope（言葉のあや）として用いられてきた。たとえば、内容上は「自由主義」と表現して構わないだろうところに「リベラリズム」という言葉を宛て、「開放性」や「先進性」といったニュアンスを醸し出す（それによって「リベラリズム」の下で括られる思想家を、「良い」者たちとして描き出す）といったことが行われている⁴。

*また、ときどき日本で用いられる「リベラリスト」とは何だろうか。どのような起源や意味合い、ニュアンスが付与されているのだろうか⁵。

*さらに、邦訳物をどう扱うかの問題もあるが、このゼミでは暫定的に、日本の論者が日本語で執筆した著作を対象とする。

本ゼミではこうした問題を念頭に、次の問いに基づく作業を実践的に行う。すなわち、日本において「いつ、どのような文脈において、誰によって、いかなる定義の下で、どのような議論が」リベラリズム／自由主義と分類されてきたか。これをめぐる分析作業を、特に「リベラリズム／自由

いたとすれば、それはどのように扱えばよいのだろうか。本ゼミでは暫定的に、「日本の」を、「日本語圏の」あるいは「日本語で書かれた執筆物における」として、リベラリズム（自由主義）の検討を進める。

³ 関連研究として、ベルやフリーデンの定義を用いながら東南アジア（インドネシア、カンボジア、タイなど）のリベラリズムを検討したものに、the special issue “Locating Liberalisms in Southeast Asia,” guest edited by Michael K. Connors and Mark R. Thompson, *Asian Studies Review* 47, no. 1 (2023). 同じくタイにおけるそれを考察したものに、Tomas Larsson, “In Search of Liberalism: Ideological Traditions, Translations and Troubles in Thailand,” *Journal of Social Issues in Southeast Asia* 32, no. 3 (2017).

⁴ たとえば、武田清子『日本リベラリズムの稜線』（岩波書店、1987年）。なおこのような、特定の価値観の基に過去の思想家群の功罪を示す態度は、今日思想史研究では「アナクロニズム」として棄却されている。

⁵ Cf. 苅部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』（岩波書店、2006年）。

主義」という言葉の使用法に着目して、積み重ねる。それによって、日本のリベラリズム／自由主義の歴史はどのように展開してきたのか、またこのように日本のリベラリズム／自由主義を再構成するとき、我々の既存の見方を揺るがす（直観とは異なる）いかなる興味深い知見や意外な事実を導き出すことができるか（cf. 福澤諭吉がリベラル／自由主義者と「なった」のはいつ、どうしてだろうか）、日本の政治思想史の地図はどのように描き直すことができるか、について考察する。

<授業方法>

上記課題に即し、ゼミ参加者各々が一次文献を読み、分析し、発表することを基本とする。分析の際の問題設定は、日本において、「いつ、どのような文脈において、誰によって、いかなる定義の下で、どのような議論が、リベラリズム／自由主義と分類されてきたか」である。分析対象とする一次文献は、基本的にどのようなものでも良い（思想家の著作や論文、過去の政治思想史の教科書、研究会によって編まれた書物、雑誌における論説等々）。日本において「リベラリズム／自由主義」が使われ始めた時代以降を対象とするゆえに、その数も膨大なものとなるはずである。こうした一次文献もゼミ参加者各々が調査し、選択することとする。これは、政治思想史における教育的効果を（も）意図してのものである。というのもこの分野の醍醐味や知見は、自身で文献を読み、解釈しようと試みない限り、得るのが難しいからである（もちろん教科書は分析上に役立つ知識補充に有意義ではあろうが、教科書の知識を得たからといって、それだけでは何の意味もない）⁶。このように自ら一次文献を調べ、それを分析しようとする姿勢を持つ限り、本ゼミは政治思想史の初学者も大いに歓迎する。

たとえば、（あくまでほんの一例であるが）以下のような著作のリベラリズム／自由主義を分析してもよい。

- 矢内原忠雄「自由と自由主義」（1929年）『国家の理想』（岩波書店、1982年）
*これは10/20の練習に用います。
- 思想の科学研究会『共同研究 転向3 戦中篇上』（平凡社、2012年、原著1959～62年）第二篇第二章「自由主義者」
- 佐々木毅「自由主義をめぐる」（『政治学は何をを考えてきたか』筑摩書房、2006年、第二部）

なお一次文献を選択するに当たって、限定はしないが、戦前・戦後期、高度経済成長期（1960・70年代まで）までの著作の方が、「意外な」事実と直面する可能性が高く面白い（それ以降は、ロック～スミス～J.S. ミルなど conventional な流れが描かれることが多い）。

ただし教育的効果も念頭に置いていることから目安として、1回で合わせて100ページ前後以上は分析することを課題とする。

最初の2回（10/13、10/20）を除き、毎回報告者を決め、報告者が対象とした一次文献の要旨と上記問題設定に即した自らの分析内容を、レジュメにまとめ発表する。それを基に参加者全員でデ

⁶ 詳しくは、馬路智仁「政治・社会思想史——歴史の天使は未来をまなざす」前川一郎編『歴史学入門——だれにでもひらかれた14講』（昭和堂、2023年）、第6章。

ィスカッションを行う。文献報告時間は 25 分以内（厳守）。（*1 時間はディスカッションにあてた炒め）

報告者以外も、必ず報告者が対象とする文献（の重要部分）を事前に熟読してくること。そのために、報告者は報告回の 1 週間前の金曜日までに、私まで、分析・報告する一次文献の重要部分のハードコピーを手渡すこと（2 号館 5F 国際社会科学専攻事務室の私の郵便 Box に入れておいてもよい）。私はそのコピーをスキャンして、メーリングリストで参加者に配布します（もちろん最初から電子化して送ってなくても構わない）。そうした「重要部分」の量的目安として、50～60 ページ。したがって、報告者以外も毎週この分量を読んでくることが求められる（もっとも日本語ではありません）。

なお報告レジュメは、当日の朝 9:00 までにメーリングリストへ投稿すること。他の参加者や私が事前に目を通したり、（ハードコピーを手元に置きたい者が）印刷する時間を踏まえての設定です。レジュメ分量の目安は、A4 で 2～3 枚程度。

<成績評価方法>

平常点（分析・報告のクオリティ、全体のディスカッションへの貢献度）：60%

期末エッセイ（小論文）：40%

期末エッセイは、大学院生・学部学生ともに、①自身の報告に基づいてその内容をまとめつつ、②そこから「日本におけるリベラリズム／自由主義」に対し（何らかの）インプリケーションを引き出し、論じること。日本語であれば 4000 字以上、英語であれば 2000 words 以上（上限は冗長にならない範囲で特に設けない）。締切りは 2 月 2 日（金）。

提出方法：次の二つの私のメールアドレスへ添付して送ること。

tbaji@waka.c.u-tokyo.ac.jp; tomobaji@gmail.com

<授業計画>

日付	課題文献	報告者
10/6	ガイダンス、導入的講義、出席者の自己紹介、報告日の決定	N/A
10/13	ダンカン・ベル（馬路智仁／古田拓也／上村剛訳）「リベラリズムとは何か」『思想』1164 号（2021 年 4 月） Duncan Bell, “What Is Liberalism?” <i>Political Theory</i> 42, no. 6 (2014), 689-90 (reprinted in Bell, <i>Reordering the World: Essays on Liberalism and Empire</i> , Princeton University Press, 2016) *邦訳をメインとし、適宜原著を参照します。邦訳の方を必ず読んできてください。文献は ITC-LMS にアップ済み。	無し 課題文献に基づく事前課題を Google form で提出してもらいます。それに基づき、私（馬路）がコーディネートしながら議論を進めます。
10/20	（練習回です） 河合栄治郎「自由主義」『社会経済体系』第 20 巻（日本評論社、1928 年）	上記と同じ

	矢内原忠雄「自由と自由主義」(1929年)『国家の理想』(岩波書店、1982年)	
10/27	*開始を 13:20 とします (昼頃まで私が本郷で国際 WS 参加のため)。終わりは 14:50。	南藤さん
11/10		
11/17		
11/21		
12/1		
12/8		
12/15		
12/22		
1/5		
1/19		

メーリングリストについて

課題文献のコピーや、レジュメを共有するためのメーリングリストを作成しますので、履修希望者は今日のガイダンス終了後から (shopping week が終わる) **10/9 (火) の夜までに**、私 (tbaji@waka.c.u-tokyo.ac.jp) までメールアドレスを教えてください。

✓ 最後に各々自己紹介 (所属、学年、問題関心など)。